

# ミャンマー 風景と影

南九州大学園芸学部教授 角 杉 壽

## 1. はじめに

機会があって、ミャンマー連邦各地を1997年12月5日から13日にかけて訪問した。行き先はバガンとその周囲、マンダレーとその周辺、ピンウールインとその近辺、トゥンテー、首都ヤンゴンとその近郊であった(図1)。

訪問機会から実行までの準備期間が短かく(約一ヵ月)、乏しい予備知識のもとでの現地観察と理解による報告である。

東南アジア諸国の中で、ミャンマー連邦(旧ビルマ連邦社会主義共和国)は具体的な情報、資料の乏しい国のひとつであろう。たとえば、人口、民族構成といった数値情報の場合をみても、4500万人、4400万人と上2桁の精度で変動がある。面積は67,652km<sup>2</sup>と高い精度で記されている。しかし不確定な国境部分は何箇所かあるとのことである。日本の国土地理院発行の1:25000地形図とその関連地図のような地図は入手できなかった。大韓民国でも日本と同精度の地図が多色刷りで発行され、民間の書店で自由に購入できる。それでも軍事施設は工場等と表記されていたりしていたが、現地での行動経路からみた地図からの情報の信頼性は高いと思われた。当地はランドサット等の地球規模でのマクロ情報が最も信頼でき、他はどうだろうかとの感触であった。より具体的な計画に応じられる情報集積と作成、提供体制の確立が問題解決の鍵

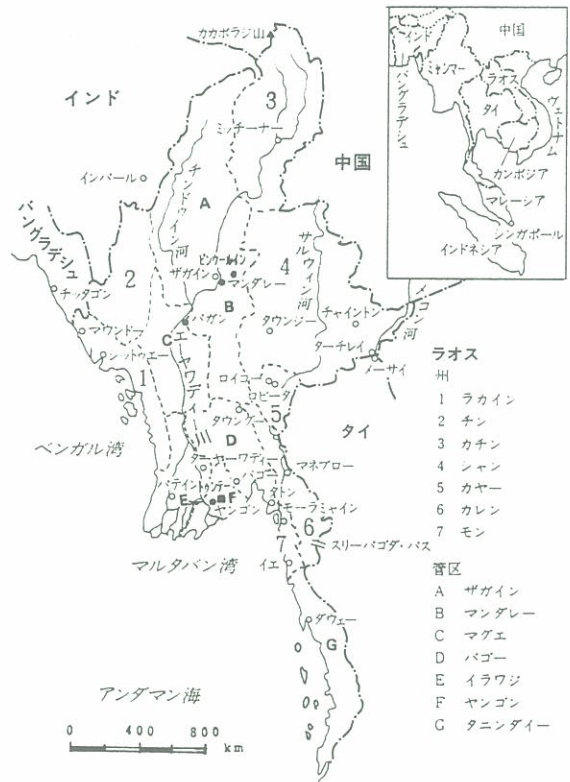


図1 ミャンマー州(1-7)管区(A-G) 主要都市(○)・観察地域(●)

となるであろう。

そのような状況のもとで、現地での観察とその判断の妥当性を高めるために次の諸点に留意して観察を行った。

①一つの事象の観察事実と関連する事象相互の矛盾がないか少ない解釈

②一つの事象の現地で接触した人達への質

問を切り口を変えた問いかけによる応答への整合性からみた一貫した解釈

③これらの全体の応じ方、内容の安定性の状態からの解釈

④関連文献等の記述内容と現地観察結果との乖離程度からみたその内容の信頼性からの判断

そこでまずゴルフ場の観察からミャンマーの風景と影の問題を考えていくことにする。

## 2. ミャンマー ゴルフ場の風景と影

現地での観察からミャンマーにはゴルフ場が多いという印象を持った。

「地球の歩き方30 ミャンマー」<sup>1)</sup>にはゴルフ場の記述はない。現地での案内人による説明では150コースほどあるとのことであった。THE MAP OF YANGON(1996)、YANGON STREET DIRECTORY(1996)とでは記載が一致していない箇所が何箇所かある。両方合算した数が少なくともあるというのがこれらの地図と現地での観察からの理解である。

観察例を紹介する。KHAYAE BIN ST. にそってDagon Golf Course, Yangon Golf Course(写真1), Da Nyin Gon Golf Clubと隣接している。さらにヤンゴン中央駅を起点とするヤンゴン環状線にゴルフコースとい

う駅まである。他に非公開の軍関係機関専用ゴルフコースも多くあって全体の約半分を占めるのではないかとのことであった。ゴルフ場はSLORC(スローク:国家法秩序回復評議会)幹部の設置判断が働いているとの事であった。

ゴルフ場の多さはヤンゴンだけにとどまらず、バガン、マンガレー、ピンウールインでも観察することができた。

バガンのゴルフ場(Bagan Golf Resort)の場合、森林局の敷地と同試験場の一部を使って、政府幹部の指示で開設されたとのことである。バガンは地域総てが生活の中で息づく仏教遺跡なので、同ゴルフ場も遺跡に囲まれた風景(写真2)を示している。

国内の土地は全て国有地であり、ミャンマーの土地とか権利とかを理解する場合、また計画事業に係わる法的手続きとか補償等を理解する場合、日本と近似させてとらえたり、推察したりして判断することは大きな誤りを侵すことになりやすい。注意を要する一例であろう。

ゴルフのプレー料金はビジターで20\$ (US\$以下全て)が多かった。ここで料金を現地通貨チャット(Kyat:以下Kと略す)で示さず、20\$とする理由がある。外国人とその観光客は国の指示で現地通貨チャットが使えな



写真1 ヤンゴンゴルフ場



写真2 バカゴンゴルフ場



い。これはゴルフ場だけにとどまらず、多くの国内観光施設、便益に適用されている。外貨が逼迫し、それを効率よく蓄えようとする政策からくるとのことである。またこのことは次の見方をとることもできる。

それはこの20 \$の記号的意味である。1 \$ 130円(1997年11月)とすると日本円換算で2600円で18ホールのプレーが当該のクラブハウスに申し込みば、待たずに開始できる。日本のきめ細かな施設的なゴルフ場とはひと味違った素朴なゴルフ発祥地イギリスの設計思想を受け継いでいるだろうラウンドが楽しめるように観察された。マナーもよいようだ。このトータルが20 \$という判断である。日本のビジタープレーの料金と便益、精神的な負担も含めた諸経費とを勘案すると、この20 \$という記号の解釈は価格という記号を通して対価、財の交換についてゴルフという見える風景に対するひとつの隠れている視点からの実像理解の側面を提示していることになる。

その時見たのはミャンマー(ビルマ)人ではなく、ほとんど中国系のプレーヤー達で、14~18才ほどのミャンマー人と思える少女のキャディーを3~4人つれて回っていた。

現地案内人によると、取り方にもよるが、生活費は一ヵ月6000K程度とのことであった。徐々に物価が高くなりつつあるようだが、無理しなければそれで生活できる金額とのことであった。

12月上旬では1 \$が実勢250Kの交換比率だったので、この20 \$は5000Kにあたり、一ヵ月の給料の80%強にあたる。1 \$ = 130円 = 250Kから1円が約2Kになる。公定レートは1 \$ = 約6Kとのことである。実勢との間に42倍の開きがある。

ゴルフ場の場合、ミャンマー人が利用する

場合、ドルではなくチャットでもよく、しかも料金は2500Kのところが多かった。

この例に示すように二重価格による大きな財の価値の交換落差を不安要因として内在していることになる。

このドルによる支払い(これはUS \$以外は不可になっており)はホテルをはじめ、特定の地域に入る入域料、航空機、列車等の運賃、決められたいく種類かの施設の入場料等がドル払いになっている。ミャンマー(国内)人はすべてチャット払いでよいのである。

### 3. ひろばと市場の記号と働き

ミャンマー国は外貨事情が悪いといわれている。また東南アジア各国共通の現地通貨価値の下落傾向とを合わせて考えると、懸命にドル収入を増やすよう努力している状況が理解される。

貨幣の交換価値のもう一つの例として、バガンでカラーフィルム36枚撮りを買った時のことである。当地では売値はあくまでも目安である。財と価値との合意は相対の交渉で決まる。そこで交渉の結果550Kが350Kで決まった。そのフィルムはフジ、さくらフィルムと日本語で表示されている。日本国内で売られているのと同じものが当地では実勢350Kであり、日本円換算175円となる。日本国内価格からすると安いとなる。例えば最初売り手に700Kといわれ、そのままそれを受容しても350円である。そのままでも悪い話ではない。ところがその半値ぐらいが現地での常識とすると、この売値をそのまま受け入れることはミャンマー社会における価値体系に大きな問題を提供することになる。

そのことは逆輸入問題とか日本人観光客の現地で高値で買うなどの日本人に対する認識



写真3 バガン市場

とか現地での財の評価に対してインフレ懸念からくる価格不安定を形成することになる。

日本国内の末端消費者段階では商品は値引かれた状態で売られている。一般の最終段階の消費者は毎日の生活を価格交渉によって財を購入していない。値札を見て広告という記号を媒介して、その価格と提供する財の有益性を選択する売買慣習を発達させている。

ミャンマーでは総て相対交渉であった。だからその交渉の場、市場（マーケット：写真3）が不可欠なのである。その交換の場を洗練させ、発達させてきたのが広場の一つの姿であろう。日本の商業的な広場とそこで形作られるデザインの冷たさ、よそよそしさが内在するのはこの必然性から乖離した存在からもたらされるところが大きいのではないか。それを埋めるために娯楽、ファッションとかの要素や時代の先取り志向等の要素を入れて、均衡を保つ内容になり易いのではないかと思われる。そこで日本の巷に生きた賑わいを作るために試みにフリーマーケットの働きを加味した広場構成による空間活性化と刺激性を持たせる可能性を示唆している。

ミャンマー各地で草履を買う、菓子を買う。総て交渉、それも言葉が介在している。それゆえ、言葉は何らかの意志を伝達する手段と

その交渉の接点として不可欠となる。その商品を巡って提示価格とそれに対してこちらも希望価格とその判断材料（理由）を示し、お互いが円満な合意つまり納得できなければならない。短時間の間に交渉を巡って、その能力を総動員して、お互いに掛け合う。このことからわかるようにそれが当地では日常生活の場面で当たり前のことである。ゼイチーデン（高いです）、ショウペーパー（もっと安くして下さい）の繰り返しでは話にならない。この交渉を媒介に人間的交流と信頼関係が形作られていく。

観光バスから観光スポットに入り、予約されたレストランに入り、ホテルに着く。指定の土産店に案内され、若干のサービスを流暢な日本語で受ける。そのような現地滞在（観光）によって現地理解をすることは注意を要する。それに対して若干の英語に加えて身ぶりを交えて総て交渉で過ごしてきたことは現地理解にとってきわめて有益であった。

ミャンマーは多民族国家であり、ミャンマー（ビルマ）語が国語で、外国語が英語とのものであるが、ヤンゴンを離れ、地方に行くとその民族固有の言語が隣接し、商品交換の場が機能し、共存していくために他の言語を解する術を有していなければ生きていけないという状況も併せて考えると、国際時代における直接交流と教育の在り方に一つの視点を示しているように思える。

私達調査グループは初めこの言葉の見えない壁にこだわりがあったが、参加の学生達の方からその壁が崩れ、交渉場面を楽しむようになっていったのが印象的であった。

ミャンマー各地における様々な場面での交渉が緊張とか対立とかの状態でなく、信頼関係を強化する方向に働いたことが評価すべき





写真4 ビルマ族

点であり、ミャンマー人氣質がそこに強く働いていると考えられた。

#### 4. ミャンマー人氣質とその精神性

ここでいうミャンマー人というのはミャンマー国籍を持つ人を指しているのではなく、その60%強を占め、この調査に触れる機会が多く、全土に影響力を強く持つといわれるビルマ族出身者(写真4)の気質を通して風景と影を観察している。

以下に説明する上記の人たちの事柄、気質等はミャンマー(ビルマ)語をカタカナ書きで示している。ミャンマー語発音とズレから著述によって異なる表記になっている場合も多くあり、地名、人名、単語等日本語表記に統一性が欠けるものも多い。決まった表記が定着するまで、かなり時間を必要とするだろう。そこで本稿の記述のために用語の対応検索表を作成したりして、十分ではないが、頻度の高い表記を用いることに心がけた。

ミャンマーではミャンマー(ビルマ)らしさということを大事にする。ビルマ人らしさ

(バマー・サン・チーン)をミャンマーではアーナーデとかアーナムという。

当地の人々に接していると、立ち振る舞い、表情に相対的に性急さがない。これは様々な場面での観察から感じられることである。前述の交渉場面でもそれが認められる。韓国でもミャンマーと同じ様に相対交渉で価格が決まるのであるが、そこではどちらかといえば強い緊張感が感じられる。それに対して現地の人達は悠揚とした雰囲気を感じられる。

例えば、他人の家に招かれ、そこで夕食の誘いを受けた場合、一度は必ず遠慮した態度をとるとのことである。それを何度か観察することがあった。それは心配事とかを煩わせ、相手に余計な不愉快感が内在した迷惑(気苦労)をかけないという配慮(気配り)を黙って行動で示すことを意味する。日本人の社会生活でも似た心情があり、このことは比較的理解しやすい態度である。この気質は後に示す仏教的教養と強く結びついた態度を形作っていると考えられる。そのためにその人の加齢にともなう成長の過程(社会化)での社会生活を送る上で、日常生活の場面でそれが強調され、欠かせない基本心情の一つを形成していくことになる。そこで何らかの出会いの場で振る舞う場合、暖かい身体感覚を持ち、相手に好まれるように処するという自己抑制が働くことになると考える。しかし、その配慮は抑制限度を超えるつまりアーナーデがなくなると怒りを生起し、憤怒がでてしまうともいう。

そのアーナーデは具体的な振る舞いとしてインチェデー(優雅、上品、丁寧などという意味)な態度、行動をとる人が尊ばれる。教養があり、優雅で、上品な、文化的な人を指し

ていることになろう。この傾向は日本文化にも認められるところである。この態度は人に対してであり、基本的な社会規範、宗教的信条の共有の態度とは関係ないところが重要であろう。日本人の多くが仲間とか身内と認めない場合の行為に「旅の恥はかき捨て」ということわざにも示されるように、無礼な行動とか高圧的な態度をとることが指摘されている。設計業の場面で、外部空間を構成したり、再編成したりする時、コンサルタント側は社会・公共への配慮よりもクライアント側の価値規範に同調する傾向が高いのもその文化・風土と関係していると考えられる。

このインチェデーの存在と共有程度は社会を構成し、空間を形成していく場合、重要な概念になっていくと考えられる。

ミャンマー各地の風景を特に分析的に景観としてとらえた時、このインチェデーという指標で観察すると、現在私達が提案し、個々に優れたと評価されているスペースはものとしての表現からの判断が強く働いており、それに対して再検討の視点を提供している。インチェデーを名詞化するとインチェムウ（文化）となる。

このインチェデーの形成にミャンマー人というボンという資質が深くかかわっている。ミャンマーは東南アジア諸国の仏教と同じ小乗（南伝）仏教である。私達の大乗（北伝）仏教と異なり、衆生という概念ではなく、個人一人一人によるネイバン（涅槃：ニルヴァーナ）願望達成にある。そこで一人一人から出発する。その個の自覚というものをその個人に備わっている徳、慈悲、栄光つまりボンをどの程度備えているかからみることになる。そのような社会システムとしてのフィードバック機構（インチェデーの存在）のもとにボ

ンを備えた人物は権威や自信が現れてくる。それは適度な慎み深さをもった中に自己主張となってくる。そのボンの力量つまり程度は周囲の人々の評価によっている。ボンの評価は自己が決めるのではなく、その人の過去のカン（功德）によって決まってくる場合が多いといわれている。功德という仏教的意味内容が現世的、魂の救済の意味場面から肯定的な価値規範の形成に機能している。

そのボンの集団的、仲間的な側面をアウザといっている。アウザを備えた人物は集団に必ず一人はおり、誰がその集団で最もアウザを備えているかは集団構成員の内面的な過程で決まってくる。誰がアウザを備えているかを他人と相談したり、聞いたりはしない。だから自分が臆面もなくアウザを備えているということはない。これは指導性の原理として重要な側面を示している。

伝統的に集団の真の統率者は自ずからアウザの評価で決まってくる。このことから西洋社会でとられている立候補とかその延長の意味での推薦とかいった民主主義的な手続きを重視する選挙によるリーダー選出とは異なった側面を持っていることになる。こうしてボン、アウザから指導者論を考えてみるのも一つの視点を提供するだろう。現在の国権の最高意志決定機関SLORCの組織ダイナミクスを理解し、その将来を見透す場合、この面からの理解は一つの重要な側面を提供していることになろう。

禁戒を破るようなことがあると、その人のボンは汚されてしまう。ボンは通常男性に備わっている。「ボンが落ちてきた」と自覚した時、禁戒を損なったことに思い当たらない場合、個人的にそれを知ろうと努めることになる。その場合重要な働きをするのが占星術師



であり、その人に相談することになる。その他の占星術師の側面についての記述は省略する。

集団・組織の統率者が上述のことからそこでの内面的な制御機構を有していることは極めて重要なことである。例えば公私混同に対して一定の抑制機構として働くのではなかろうか。多くの国で、社会性とかかわる組織全般を健全に運営していく一つの機構としての知恵を示唆している。従って環境にかかわる諸問題の解決—合意形成に集団間調整原理の背景規範としても重要であろう。

当地で知った禁戒の例をいくつか挙げてみよう。男性は女性の衣服にむやみに触れない。その行為はその人のボンが損なわれることになる。また宗教的な規範からくる種々なタブー（例えば当地の仏教でいう五戒）を破った場合とかにおこるとの説明であった。

そこで個人はこのボンをどのように備えていくかにある。それは具体的で継続的な不断のカン（功德）を積んでいく行為を通して人々に備わっていくという考え方である。

何らかの目標に向かったり、問題解決をはかっていく場合、この意志決定機構として働く基本がこの功德ということなのであろう。

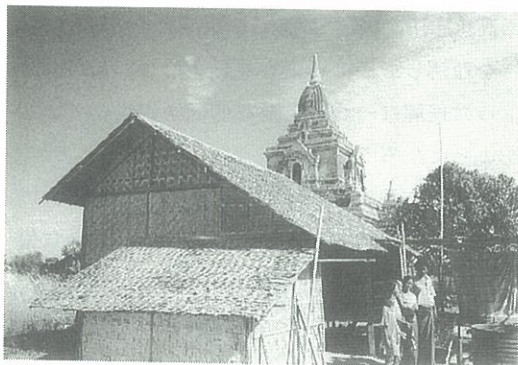


写真5 ミャンマーの家庭

## 5. カン（功德）の形成

個人は生を受け、家族の一員になる。エイン・ダウン（家庭：写真5）とミーダーズ（家族：写真6）という基本単位がミャンマー人意識を形作っていく。このエイン・ダウンの拡張概念のエイン・ダウンダーズ（世帯）は日本のイエ概念にある継承性をともなわない世帯となっている。

語源的にエインは建物としての家、ダウンは建物を建てるから拡張されて、結婚して家庭を持つ意味になる。また家族・世帯は家屋をもとにしているという特徴を持っている。エイン・ダウン（家庭）ダー（人）ス（集まり）は世帯の意味になる。それに対してミーダーズ（家族）はミー（母親）ダー（子供）ズ（集まり）つまり血縁関係しかも母系から出てきたこと暗示した母子の絆に基づく家族と考えられる。

ミャンマーには日本のような家制度がなく、結婚してどちらかの家に入る（男側が主という）日本のような考え方はない。また名だけで姓を持たない。結婚しても改姓しないし、名から親子関係を類推できない。また先祖の墓もないので、自分の生まれの筋についても明確でないことが多いといわれる。

個人のアーナーデとかコーケン・サーナー



写真6 ミャンマー農家の家屋

ムとかに示されるように個人の人格形成，生活観の形成に働いている。表1に示すように人生の節目を形作る通過儀礼と深くかかわる仏教行事からこのことを理解してみたい。

誕生から死までを通す人生・生活観，その成長の過程での人格形成，それを方向づける1年という年を巡る行事は1年周期の天文現象と気候周期から暦という形に洗練化させ，それと仏教の人間観の認識とを組み合わせ，全体の社会認識までを一組の体系として形作っている。この仏教観の基本として形作られる社会は図2に示すようにミャンマーの地に移動・侵入，交渉してきた種々の文化複合体の文化を取り込みながら現在を形作っている。それらは仏教的，バラモン教的，土着信仰的要素が1年間の行事とそれぞれの個人の年齢に応じた通過儀礼行事が一組になって存在している。外部からこの行事，祭事をみると非常に複雑な様相を示し，その映像から本質である影は見えにくい。しかし，その本質には仏教を軸に他の二者が相互に補完し，仏教的価値を強化していると考えられる。（その裏付けを示すことは論の展開上の煩雑さから，それぞれの専門書に譲ることにする。<sup>6)</sup>）そこで功德観の形成とその実践を中心に取り上げて見る。

季節変化は気温，雨量の変化（図3）を通して樹木をはじめ植物，地表面の形態，体感等の感受を通して周囲の風景変化と相まって知覚される。それは気温，雨量の連続的な変化ではなく，急変する特徴を示している。このことは異なった意識，心理状態を形作ることになる。

ミャンマーの暦はコオザー暦といわれる太陰暦（旧暦）に新たにヨーロッパからの西暦：太陽暦（新暦）を受け入れた暦である。

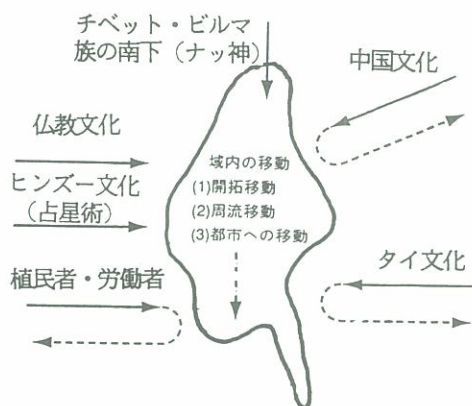


図2 ビルマ文化の形成

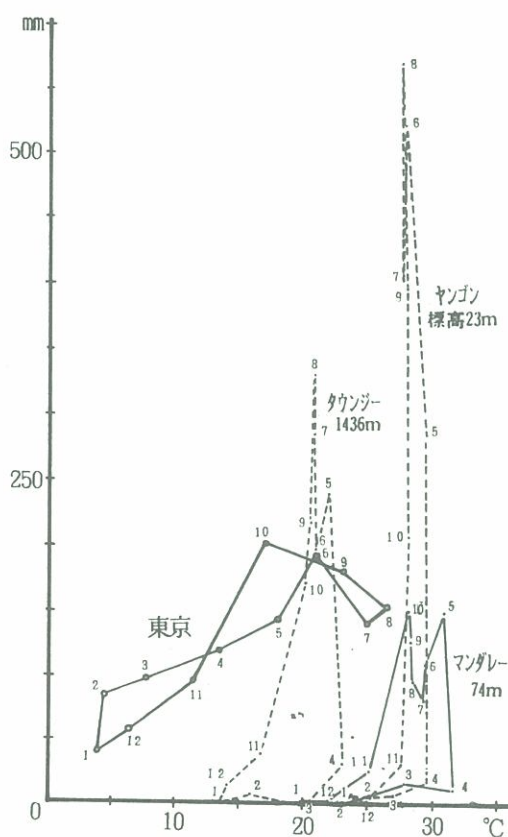


図3 雨温図 (hyther-graph)







写真7 ポンジーの托鉢

ン教が背景にある宇宙観に基づく占星術とが人生・生活規範に大きく働いている。その全体が仏教をもとにした通過儀礼、日常生活の節目がミャンマー暦（新暦）とその固有の日にちによる最表層の生活スタイルの背後に太い生活規範を構成するヤンマー文化体系として働いていることが理解される。

功德はこのような通過儀礼と日常生活とのかわりの中で、効果的に強化されるようになっていく。

生を受けた子供達がもの心つく前から日常生活の中にコウイン（沙弥）、コウインヂー（比丘）といったポンジー（僧侶：写真7）、（メイ）ティラシン（修道尼）と家庭とは托鉢という生活者の日常の功德で結ばれている。

ミャンマーの生命観によると現世は過去世の続きであり、来世への一つの過程である。現世の様々な苦しみや不幸は過去世の行いがよくないためであり、来世をよい方向に、またネイバン（涅槃）を得るためにこの世で功德を積み、修行に励み、日々充実した生活を送らなければならないと信じられている。そのため現世で継続的な功德として僧侶に食事を提供する。この様子は村々、市井で一定時刻に定まった家で目にすることができる。

また別の功德の一つとしてウポウ（布薩）ネ

（日）がある。これは在家者が月4日、出家者は月2日の戒律を守るという宗教的勤めがある。その日は8日と15日の（満月の日）、23日と晦日の（新月の日）、出家者は15日と晦日である。1年に12回布薩日（合計48日）がある。しかし年に何日かは何らかの事情で布薩日がとれない人も多いとのことである。さらに年に3カ月ほど雨安居という慎みの期間に入る。期間はワゾー月旧暦7月15日から10月25日である。この節目の明けは国の祭日にもなっている。この期間は僧・俗共に生活総てを控え、慎みのある生活を送る。在家者はこの期間の布薩日は特に意識して慎み、夕方の日常勤行を行うなどして積極的に仏教修行を遂げる。

出生から少年期にシンビュー（得度）式で受戒し、一度一定期間聖界に入り、得度修行する。それは五戒を倫理基準にした仏教行事による修行を経て、日常生活にもどる。この得度の経験を経て、人々は輪廻転生を繰り返す自らの存在が少しでもより良い状態に再生することを願うように自覚的に振る舞うようになる。再生は各人の持つカン（功德）によって決められる。カンそのものは現世での行為によって左右されると考えている。良い行いは功德として各自のカンに積み上げられ、ふさわしくない行いは悪徳として同様に蓄積される。死の時点で両者の差し引きが行われ、それぞれの多寡に応じて来世が決められると理解されている。当面の良い再生を願う人々は功德がそれへの証明書と考え、絶えず意識して功德を積む社会傾向となる。

積善の功德にはその功德の広がり、大きさから多寡が左右される。次の①～⑦へと功德の大きさは小さくなっていく。功德の多寡をもたらししているのは対象の持つポンの大きさ



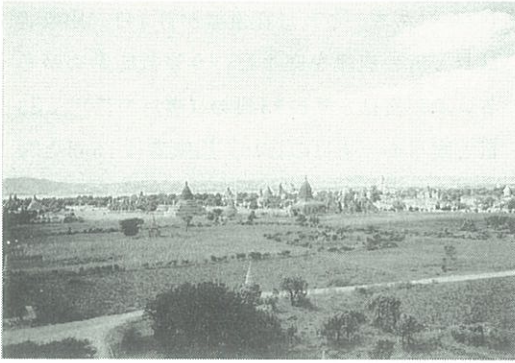


写真8 バガン全域に広がるパゴダ群

からくると理解されている。

- ①パゴダ（仏塔）の建立
- ②得度式の主宰
- ③僧院建立
- ④僧院の井戸または鐘の寄進
- ⑤食事の寄進
- ⑥僧への布施
- ⑦対俗人への物、サービスの提供

仏陀と寄進者との間には寄進者の一方的帰依があるだけである。他者への施し（喜捨）は行為そのものに価値があり、その結果は行為者に加算される功德として還元される。それゆえ利他的行動の諸相（諸様式）となって現れてくる。しかし、功德の概念にもともと他者とのかかわりが不在であったとしてもそれを積む行為に社会関係が入り込んでくる。そこで功德を契機に社会関係が形成されるという世俗的意味も内在することになる。そこで寄進によってパゴダ、僧院が好んで建てられ、より大規模、より多くの参加者、より多くの布施が志向される。また功德を一緒に積む人達は来世も一緒に生まれるといい、儀礼参加者間に一種の連帯感を与え、共通の目的を持って時間と空間の共有をこの儀礼に与えることになる。現在もこの趣旨に沿ってパゴダが建立され、功德の価値観が再生され続け

ることになっている。また得度式のような儀礼を主宰する者は参加者達に威信と影響力を示すことになる。主宰者は帰依の篤さと人々に功德を積む機会を与え、貧富の開きを抑制する代償に主宰者が名誉を得るという互酬性原理が有効に機能することになる。

この態度が例えばバガンに見られるバガン王朝（1044～1299年）期に建立された2500基以上ともいわれるパゴダ、僧院建設（写真8）になり、現在もこれらのパゴダは単なる遺跡ではなく、今も信仰対象として崇められ、時の支配者が歴代にわたり、寄進し、現在のバガンの風景の背景となっている。現在の政府も文化省が中心になって修復に力を入れている。この生活に結びついたパゴダはバガンを初め立ち寄ったメイティーラ、マンガレー、ヤンゴンさらにタウンテーに止まらず、ミャンマー全土にわたって認められるとのことである。この事実を無視して、日本人的感覚でパゴダを観光対象として接することは当地の人達の聖域を汚す許されない行為と

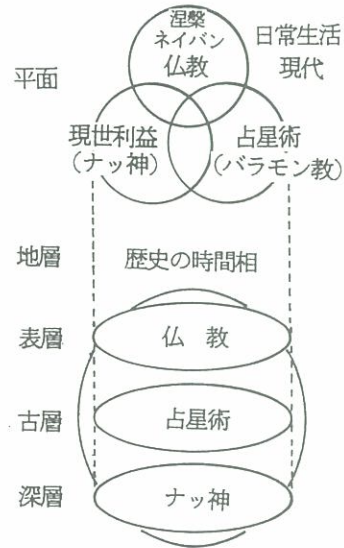


図4 ミャンマー風土の精神世界の形成

なる。

バガンの壮大なパゴダを中心とした仏教遺跡の風景と影については別の機会に譲ることとする。またこの功德と対になって理解されている現世利益にかかわるナツ神と仏教との関係、占星術との関係などについても同様に省略する。概要を図4に示すとどめる。これらの諸相が生活の場面、人生の場面とそこから形作られる生活空間の風景の影（規範部）を形作り、相互に強化・牽制しあっている。その結果、社会原理として功德を基本にした秩序を中心にそれぞれの地域の風景が形作られ、動いているように思われた。

## 6. 時代共有性からみたミャンマー指導原理と影

現代の景観、訪問者から見た風景は背後の構成原理をもとに姿を見せている。その指導原理を仏教精神をもとに取り上げてみる。

バガン王朝、タウンジー王朝、コンバウン王朝と異なる歴代王朝の諸王とその関係者は熱心にパゴダを上述の動機から建立し、僧侶に寄進し、それがまた王権の権威と深く結びついていた。王の評価はいかに熱心な仏教徒であるかで判断され、仏教は支配者の資質を問う一つの基準（正当性を与える原理）として持ち続けている。

現代の国権を代表するSLORC（国家法秩序回復評議会；組織図：図5）とそれに至るまでのミャンマー（ビルマ）政治の理解は複雑多

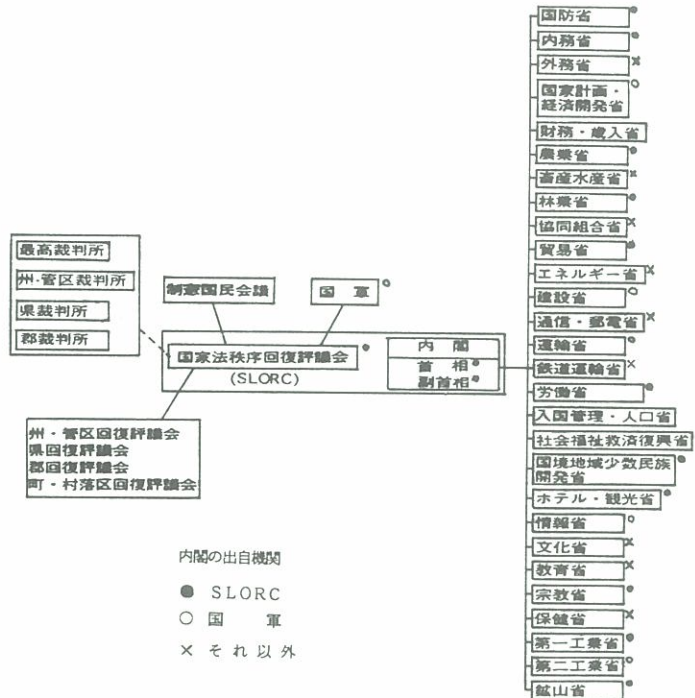


図5 ミャンマー国家機関組織構成<sup>3)</sup>

岐にわたるものがある。英国植民地化、日本軍政化、独立後の混乱とそこからの秩序回復過程、その道筋でのアウンサン・スー・チー問題と相互に関係し合い、大きなミャンマー政治問題という背景を形作っている。そのことを通観した上で、風景の今後の舵取りの点から考えてみたい。

ミャンマーの諸王朝はその盛時に国外からの武力によって滅亡しているのを特徴としている。最後の王朝コンバウン朝もそのような時に大英帝国によって滅亡させられた。

仏教の伝統・活動を背景に英領時代に僧侶の政治活動が顕著になる。それは王権が滅亡、無力化する状況ではミャンマー人にとって仏教が精神的支柱であるとともに、社会的、政治的な共通の場となってくる。僧は聖人ゆえ正しい識見を持つものとして社会から継続的な信望を持っている。他方植民地体制



の統治理念と実践は仏教の世界観とは異なっている。この新たな状況を彼らは次のように解釈した。それは世界の破滅相が具現化したものであり、同時に新しい世界の到来を予告するものであるととらえ、青年僧多数が参加した民族主義運動に大衆的基盤を与えた。それは当時ミャンマーに入ってきた社会主義思想と結びつき、反英民族主義運動に社会変革のイデオロギーを加えた運動となり、その思潮が独立後のミャンマー社会を方向づけていくことになった。それが独立後の仏教社会主義による国家建設であった。その行き過ぎが政教分離の立場に立つ社会主義政策路線をとることになっていった。この世俗とかがわる状況は僧界の規律を弛緩させ、自浄能力の欠如から当時の政府の指導の下に、全宗派による僧侶機構ができ(1980)、浄化がはかられ、指導力が回復していった。

国家の指導者達も熱心な仏教徒であり、仏教からくる倫理性、指導原理の中に功德の蓄積を通じた指導性の確保に努めようという意志を持っている。そのことを通して政治への責任感と信念を形作っている。

現指導体制は民主主義の手続きからとらえればその手続きが中断された状態にある。その中断状況は正常ではないということを諸種の資料からSLORCとそれを支える軍機構は理解していると思われる。しかし、それを実行することによって招来する国家危機例えば国家分裂、民族間を含む人心の対立・決裂を未然に防ぐという信念による現在の決断ではなかろうか。またこれには独立から現在も内在する民族問題と周辺諸国の混乱と安定化の過程などの理解からの判断も働いていると考えられる。こういった信念に基づいて国家指導・運営がなされているのではなかろうか。経済

の破綻から発生した1988年の混乱から市場経済の導入により、国内安定化と経済再建を最重要課題として取り組んでいる。こうした経過を経て、現在ミャンマー国内では特定の地域を除いて、原則行動自由となり、その範囲が国内安定化とともに拡大していつている。また灌漑事業とかその関連ダム建設、工業団地の造成、外国人観光客誘致政策とかによる国民所得の向上をはかりながら、秩序回復、安定化を確保し、信頼性を回復し、国民からの受容を得る過程を通して現体制を受容した民政化を計ろうとしているとも考えられる。<sup>5)</sup>

SLORCという国家指導者集団はこの信念のもとに実務を行っていると考えられる。ミャンマー国民に共有する強い集団指導原理によった指導者の舵取りが1988年から現在までの歩みであり、現在の最高指導者SLORC議長タン・フエ上級大将(首相兼国防相兼国軍司令官)もその優れた属性を有しているのではなかろうか。東南アジア諸国、東アジア諸国では国家指導者の指導原理がその国の将来の安定、発展に与える影響は極めて大きなものがあり、ミャンマーも以上のことから例外ではないと考えられる。ミャンマーは前述したように総ての土地は国家に属し、私有地は認められていない。これもミャンマー独自の仏教的風土と意識の基層と深く結びついて社会形成に働いていると考えられる。

そのことに対する認識は重要な鍵である。ミャンマーの現指導体制とリーダーシップの将来を判断するのに注意を要することがある。アメリカ合衆国を初めそれと協調体制にある国々(日本も含めて)が「ミャンマーでは人権が抑圧され、民主化がはかられていない。政体に民意が反映されていない」として制裁に援助停止とか抑制がなされている。文化の

違う人達に無理矢理いうことを聞かせるよりも主体性の中に好きなようにさせつつなおかつ国益が損なわれないですむ第3の道を探ることが大切であるという考え方も重要ではなからうか。

このことは基底のところには中華人民共和国と共通するものを持っている。中国も民族統一の問題、人権抑圧と民主化の問題、その中で経済開放の問題を持っている。人権について国際世論とのかかわりで見ると、中国指導者は孫文の三民主義では民族主義、民権主義、民生主義の三主義で構成されている。

中国指導者はそれを引き継ぎ民主主義といわず、民権主義という。つまり人権といわず民権と使い分けている。これは西洋諸国の民主主義や人権をそのまま運用できない中国社会の事情が意識の背景に隠されている<sup>2)</sup>。自国文化の中で、その思想を取りこもうとする強い心性と誇りの存在ともいえようか。そのことはミャンマーにも認められるところであろう。歴史が示すように必ず主権を奪回する時がくる。それが中国の近代化のブレーキになったと見ることもできる。これはミャンマーの場合も、仏教僧侶の運動にも認められるところであった。しかし、外来文化を受け付けず、外国から学ぶ謙虚さを欠いているというわけでもない。例えばビルマ料理、人形劇と外来文化を柔らかく受入れ、自国文化にまで洗練させている。孫文は欧米諸国の選挙制度は人民の政府を実現するための究極の理想であることは認めていたが、そこに至るまでの過渡期は知識人による軍事的独裁を強調している<sup>2)</sup>。中国の指導者達（支配階級）も現在の中国で実施するのは早すぎるという共通意見を取り続けている。新聞を初めテレビ等の情報メディアは国営で言論統制が行われている

のも共通している。

民主政治が実現するということは基本的に民意を代表する政治家と媒体（メディア）の発言権が官僚や国軍より強くなることだから政治家と媒体の素質がよくなければシステムそのものが効果的に機能しない。そこまで至っていないという判断が国家に共通する事態とその認識について現在の支配体制側の統治原理を意義づけているのではないか。国軍の権威が弱体化すると主張の異なる立場から出される社会問題が政治問題化され、社会不安が拡大され、治安が悪化し、国民に不安感を与える。そこでは、指導部は社会の動向に過敏となり、強い反応を示すことになる。

そのような微妙な状況下では言論の自由には媒体と享有する人々の自制心と社会的責任の存在が大前提となる。そのため民主主義を実施するのは時期尚早と判断し、民権を認めるが民主を約束しないという判断とその対処への方略ではなからうか。

中国の指導者は国によって人権は違うという。つまり人権とはメシが食える権利のことだと。政府の仕事はそういう人達を安心させることであり、そのために生産性が上がるように仕向けることが第1であり、そうした努力をしている政府に対して統制を乱す行為に出たり、それを支援する活動をするのは人権侵害になっていると主張する。だから政府の転覆を意図した人達の人権を守るよりも国民が豊かになる人民の権利を守ることつまり人権より民権を優先させるべきであり、国の秩序を守ることが人権を守ることになるという論理となる。そのような論理はアメリカ等では通用しない。アメリカを初め先進国が最恵国待遇の停止とかを切札に人権の教育をしようとしている。これらの風圧は少しずつ効



果が現れている。それが昨今の状況であり、1996年に始まった国際観光年の取組もその一つの具体的現れであろう。

土地そのものが作り出す富よりも労働力によって作り出される工業社会による富の方が多く生み出し、国民が豊かになる。人作りに成功すれば、日本のように豊かになれる。

しかし、その人材育成面にヤンゴン大学の閉鎖に見られるように大きな問題を抱えている。また経済に促されて政治体制が徐々に民主化の方向に動いている。この状況は一步間違えると、国軍が支えている中央の権威が地に墜ちるだけでなく、タガが緩んだ国家はバラバラになる恐れを強く内在している。高等教育の中断による後継指導層の不足も不安材料である。さらに現在の指導体制に見識がなければ新しい変化に対応できなくなる懸念も強く持っている。指導部も国家運営総てに時代の変化に対応できるかを点検しなおす必要がある。お互い原則を主張することよりも現在のお互いの利害関係を調節することがより現実的方略であろう。

政治は土壇場になるまで変わらない傾向がある。政治家も官僚も既成秩序の擁護者であるから、社会の変化をもたらす大変動が出てくると妨害する傾向が強い。カリスマ性があり、指導力のある指導者が古い体制を覆して新しい秩序ができると、それぞれの分野で生活する人が定着する。そういう人達が既得権との絡みで改革が頓挫する。ミャンマーでも中国の経済特区のような独自の開発区域を作って実績を作ろうとしていくと思われる。

政府のやり方に不満を持った人々の要求は以前の閉塞した体制に戻れとか、国内の混乱ではなく、より民意を反映した政府の形成であろう。それを人々の方から民主化要求とし

て政府に突きつけられると、政府転覆につながりかねないから危険このうえない行動ととられてしまう。体制側自らの方から民主化するのには差支えないのだから、政府と軍が一体となった国権のもとで人々は政府と国とをわけてとらえているが、国民が政府を代える平和的手段を持っていないと緊張は加速化し、一触即発の状態に追い込まれることも考えられる。一つの国にとって国の存在を脅かすような思想に多くの人が賛成してその思想が蔓延する。その時々を政府を脅かす思想は常に危険思想と見なされ、それを主導する人物は危険人物と見なされきた。その危険な事態を未然に防ぎたいければ、指導部でその考え方を先取りして、慣れ（免疫）を作ることであろう。経済の安定、向上をはかりつつ慣れを作る。ミャンマーの社会規範の影に存在する功德を積むという共通尺度にも合致することになり、一つの現実的な方向ではなかろうか。そこに仏教精神が息づいているところがミャンマーのアーナーデの心ではなかろうか。

## 7. ミャンマーの風景と影のまとめ

本稿は短期間の観察からの理解をもとに考察したものである。そのため他に公園、遊園地、自然公園と自然保護、植物園から植生への観察、街路樹と道路と交通、農家と集落空間の構成と牛の役割、焼物作りの集落と制作、遺跡の保全（仏跡、王宮等）と観光、戦跡の扱われ方、料理と調理法と食事、材料と市場と農家での生産形態、エーヤワディー川と溜池を含む水空間と水の象徴性、漆工芸、織物、金細工とか石仏をはじめ宗教関連施設の製作、建築と住宅、庭と庭園、都市づくりとかについて触れることができなかった。また乾期での現地観察であり、もう一つ重要な

側面の雨期での経験は得られていない。それは観察者にとって影の部分である。

また記述においてある特定の風景の理解とその影の理解を強調している可能性も高い。

景観の構成、再編成を扱う場合、その現象の背後に働く社会構成原理、作用原理とその影（潜在構造）を理解して初めてより継続的な中に生長する景観の時間的展望が開けると考える。また景観という姿は社会の特徴と問題を示している。ある景観を作る、提案するという事は社会にある特定の価値を導くことを意味している。それゆえ景観構成にかかわる影の分析とその考察は重要である。ミャンマーの景観の理解は景観を通してその見えない景観構造とその問題を理解することにある。その理解と展望のもとに現実の問題解決の手順と姿が導き出されると考える。ミャンマーを事例に考えてみた次第である。ミャンマーには功德を鍵にその社会を肯定的に保つ原理と利己主義化を抑制するフィードバック機構が景観の背後に働いている。この原理は私達の社会をこれから考えていく時に得るところが大きいと考える。

## 参考文献

- 1) 地球の歩き方編集室：地球の歩き方 30, ミャンマー'97～'98年版, 1996
- 2) 邱 永漢：中国人の思想構造, 1997
- 3) アジアネットワーク：ミャンマー情報事典, 1997
- 4) 綾部恒雄ら編：もっと知りたいビルマ, 1983
- 5) 田島高志：ミャンマーが見えてくる, 1997
- 6) 生野善應：ビルマ仏教その実態と修行, 1995

補注) 執筆後に新聞等で示される国家平和発展評議会 (SPDC) と国家法秩序回復評議会 (SLORC) との関連性は未確認である。議長は変わらない。